

## 記憶のバトン

感想ノートには英語のメッセージも多く、展示物を翻訳しながら向き合っている方も沢山いました。

国境を越えて伝わっていることに感動し、世界で共有すべき記憶であると改めて思いました。

私の中学校では、三年間平和学習をしてきました。

中でも印象に残つて「こと」と、平和についての私の思いをお伝えします。

一つ目は修学旅行で、ヒロシマの平和記念館を訪れたことです。

実際にその場に立ち、田と肌で感じた時、それまでの学びだけでは分からなかつた原爆の恐ろしさを想像以上に感じました。

子どもが着ていた焦げた制服、食べるはずだったお弁当など、展示物には人々のリアルな暮らしや思いが刻まれていました。

特に心に残つているのは、徵兵された兵士が家族に残した「行ってくるよ」という一言の手紙です。

「行って帰つてくる」という意味を含む「行つてきます」を使わなかつた」と、その人の覚悟と家族への思いが表れていたと感じました。

自分はもう帰つてこられないかもしないと分かっていながら、それでも家族に心配かけたくない気持ちが、その短い「行ってくるよ」という言葉に込められているように感じました。

戦争について「悲惨な出来事」と考えていましたが、私たちと同じように生きていた人達に突然起きた現実だったということを実感しました。

混み合う資料館でしたが、不思議な静寂を感じました。

人々の思いや哀しみ、祈りが混ざり合つた重い空気感がありました。

野沢中学校 三年 関 結奈

「一つ目は日本の加害について学んだ」とです。

日本はアジア各地へ軍事的に進出し、大きな被害を与えました。

また、朝鮮では日本語の使用や名前の変更を強制する「同化政策」が行われ、現地の人々の文化や生活が深く傷つけられました。

これらの歴史を深く知るために、私たちは実際に松代大本營を訪れ、巨大な地下壕を見ました。

暗く冷たい空気の中を歩くと、当時ここで過酷な労働を強いられた朝鮮半島出身者の人々のことを身近に感じました。

戦争が終わり、工事は中止になりましたが、犠牲となつた人も多く、今も完全に明らかになつてない問題が残つていることがわかりました。

松代大本營が建設された背景には、沖縄戦の後に予想されていた本土決戦があります。

日本政府は本土決戦に備えて、政府中枢機関を松代に移す計画を立てました。

つまり「沖縄戦を長引かせその準備の時間を稼ぐ」という意味合いもあつたのです。

その結果、たくさんの沖縄住民が争いに巻き込まれ、多くの命が奪われました。

沖縄戦と松代が密接に結びついていたことを知り、戦争がもたらす影響の大きさを考えました。

過去の加害を知ることは、戦争を繰り返さないために欠かせないと

思います。

そして、日本が多くの国に苦しみを与えた」とも、忘れてはいけないと思いました。

三つ目はジャーナリストの遠藤正夫さんからお話を聞いた」とです。

遠藤さんは、日本のメディアが立ち入れないようなレバノン、ウクライナなど世界の紛争地を取材してきました。

現場主義を大切にし、そこで暮らす人々の姿を映像とともに伝えてくれました。

映像では遠くで爆発する音が聞こえ、砂埃の中を走って避難する人々の生々しい姿が映し出されました。

カメラが揺れるほど近くで爆音が響き、取材している遠藤さんが避難する場面もありました。

ジャーナリストが狙われる」ともあるのです。

取材を続ける遠藤さんの姿からは、危険だからこそ、「そこ」で起きている事実を伝えなければいけない」という強い覚悟を感じられました。

私は戦争や紛争は過去のものではなく、今、この瞬間にも世界のあちこちで起きている問題なのだと実感しました。

最後に。

では、私たちはどうすればよいのでしょうか。

私は、今までの学びを通して「平和は誰かに任せることではなく、自分達自身でつくっていくもの」だと思います。

資料館の展示物に映る人々の表情は、今でも私の中に強く焼き付いています。

「本当にこんなことがあったのだろうか」と、疑つてしまつほど信じがたい事実ばかりでした。

今、私たちはその犠牲の上に立ち生きていらざる「」とを忘れてはいけないと感じます。

平和学習で学んだことを、ただの知識で終わらせず、「」のよみがえりしていくことが、平和への一步だと考えます。

沖縄戦で生き残った中山きくさんは

「思つて居るだけでは、平和は来ない」

行動してほしい

平和なときしか戦争は止められない

黙つているのは認めているのと同じ

若いあなたたちが私から平和のバトンを受け取つてほしい」という言葉を残しました。

私は知ること、学ぶことをやめず、記憶のバトンを受け取り、渡していきたいと思います。